

主題と構造の面からみた
A Passage to India の第一章の意義

岩 山 太 次 郎

E. M. Forster (1879—) は *Aspects of the Novel* (1927) で、小説の “pattern” ということについて、

... a novel should be a whole—not necessarily geometric like *The Ambassadors*, but it should accrete round a single topic, situation, gesture, which should occupy the characters and provide a plot, and should also fasten up the novel on the outside—— catch its scattered statements in a net, make them cohere like a planet, and swing through the skies of memory.¹⁾

と述べている。そして “rhythm” ということについて、小説の “rhythm” とは、反覆と変化 (repetition plus variation)²⁾ であって、そういうところに小説の一つの纏まりがあると説明している。

こういう “pattern” とか “rhythm” というものが、*A Passage to India* (1924) にあるかどうか、もしあるとすれば、それがどのようにこの小説で展開されているかを、この小説の第1章を中心に検討してみようとするのが、この小論の目的である。

Forster がこの小説の Everyman's Library edition の “Author's Note” に書いているように、*A Passage to India* というタイトルは、Whitman の “Passage to India” という詩から取られたものである。その詩は、印度への新しい passage が出来たからそれを讃歌するというのが表面的な意図であろうが、単にそれだけを歌おうとしたものではないよ

うに思える。少なくとも、印度の内面を識るということの意味がその根底にあるのではないだろうか。

Passage to more than India!

Are thy wings plumed indeed for such far flights?

O soul, voyagest thou indeed on voyages like those?...

Passage to you, your shores, ye aged fierce enigmas!

Passage to you, to mastership of you, ye strangling problems!

You, strew'd with the wrecks skeltons, that, living, never reach'd you.

.....

Finally shall come the poet worthy that name,

The true son of God shall come singing his songs.

Then not your deeds only O voyagers, O scientists and inventors,
shall be justified,

All these hearts as of fretted children shall be sooth'd,

All affection shall be fully responded to, the secret shall be told,

All these separations and gaps shall be taken up and hook'd and
link'd together ...

このことは *A Passage to India* についても言えることであろう。印度への voyage とか、単に印度を見ることを意味するものではなく、更に深いところに、そのタイトルの意味がある。そういうタイトルを付けられているこの小説が主題として扱っているものは、物語が展開され始める章である第2章の冒頭で、Hamidullah と Mahmoud Ali という二人の印度人の会話に明瞭に示されている—— “whether or no it is possible to be friends with an Englishman.” (p. 12)⁴⁾

印度は、とりわけ第3部を除きこの小説の舞台になっている Chandra-

pore という市は、これら二つの異質な民族を既に内含したところなのである。しかも、そういう二つの異質な要素を含んだ印度の一つの市である Chandrapore は、外面的には他の印度の市の如く何も変わったところは見受けられない。第1章の第2行目に“the city of Chandrapore presents nothing extraordinary” (p. 9) とあるように、この小説はそういう点から書き始められているのである。

Ganges 河流域にある一般の市の如く、この Chandrapore の市はみすばらしい市なのである。河岸は塵芥が積み重なったようになっていて、河もこのあたりでは神聖な河ではなく、bathing-step もなく、市の市場は、河の美しい流れをしめ出している。そういうところが2マイルも続いているのがこの Chandrapore の市なのである。街の風景といえば、

There streets are mean, the temples ineffective, and though a few fine houses exist they are hidden away in gardens or down alleys whose filth deters all but the invited guest.... There is no painting and scarcely any carving in the bazaars. (p. 9)

なのである。

これが目に見える Chandrapore の市なのであるが、上の引用文中で、注意しなければならぬ描写が一つある。それは、この市にある古い立派な家が庭園の奥深くか小路の不潔さの蔭にかくれていて、その filth が招かれざる客は寄せつけないというところである。この招かれざる客が、第2の Paragraph に述べられている “Inland” の高台に住む欧州系の人達や、更に向うの高い坂の上にある civil station の住民であるイギリス人なのである。彼等の住んでいる坂の上の土地は、Ganges の流域にある Chandrapore の下町からは離れたところにあり、外観も違ったものである。

Inland, the prospect alters. There is an oval Maidan, and a long sallow hospital. Houses belonging to Eurasians stand on the high

ground by the railway station. Beyond the railway — which runs parallel to the river — the land sinks, then rises again rather steeply. On the second rise is laid out the little civil station, and viewed hence Chandrapore appears to be a totally different place. It is a city of gardens. (p. 9)

奥の高い坂の上にある civil station の家々は、ごみごみした Ganges 河周辺の印度人の住む民家や見るかげもない寺院を見おろして建っている。キリスト教徒の住むところが “a city of gardens” であるならば、印度人の住むところでは、樹木まで泥で出来ていて、人民は動く泥のようである：“the very wood seems made of mud, the inhabitants of mud moving.” (p. 9)

ところが、この小説全体を考慮すれば、確かに、印度にある宗教としては、Islam 教や Hindu 教が別個のものとして大きくとりあげられていることは、誰もが認めるところである。従って、この市に住んでいるところの印度人を、キリスト教徒であるイギリス人に対して、一つのもの或は一つの宗教を信ずるものとして簡単に考えてはいけけないのではないかという疑問を抱くわけである。もう一度、この小説の第1頁より読み直してみよう。

第1章の第1と第2のパラグラフには、それぞれ一度ずつ “temple” という語が使われている。“temple” という語は、普通、キリスト教以外の宗教で神を祭り、それを礼拝する聖堂を意味するのであるが、この小説の第3部のタイトルや内容からも分かるように、第1章で使われている “temple” という語は Hindu 教の寺院をさしているかの如く考えられる。もしそうであるとすれば、Chandrapore に住む印度人の宗教を一応 Hindu 教で代表させて考えることも出来るわけである。しかし、この第1章が含まれている第1部は “Mosque” というタイトルがつけられていることに注目しなければならない。“Mosque” というのは Islam 教の寺院なので

ある。従って、第1章では、表面的には一つのものに見える印度の宗教は、少なくとも Islam 教と Hindu 教の二つに分けて考えなければならないし、“temple” という語は、二つの宗教の礼拝堂を意味することになる。このことは、この小説が三つの parts に分けられている一つの意味からも言えることである。第1部は“Mosque”と名づけられ、Islam 教を、第3部のタイトルは、“Temple”であって、そこでは Hindu 教を、第2部は“Caves”とされているが、その内容では、Mrs Moore とか、Adela Quested とか、Ronny Heaslop や Cyril Fielding 等のイギリス人が重要な意味をもつ章であって、キリスト教を代表しているのである。（これは“cave”がキリスト教の symbol であるということではない。）

しかし、この第1章では、Hindu とか Moslem, Brahman とか Islam といった具体的な宗教を表わす語を使わず、“temple” という語が暗示するように、印度人というものを Hindu と Moslem に分けて考えなくて、キリスト教徒に対するものとしての印度人というものになっている理由がある。それを考えるためには、Hindu 教 (“God is love”ではなく、“God is love”即ち “Love is God”) の信者であり、作品中、特に第3部で重要な役割を示す Professor Narayan Godbole の function を無視出来ないが、ここでは Dr Aziz を中心に Moslem と Hindu とが、第1章ではある意味から一体化して考えねばならぬ点を指摘する。Dr Aziz は Islam 教徒である。彼は、第2部に於て、Mrs Moore と Miss Quested を Marabar caves へ案内する。そして、caves の中で最も立派なものとしてされている Kawa Dol で Miss Quested にいたずらしたという嫌疑から起訴されるが、その公判の結果、それまで相互に敵対視していた Hindu と Moslem は協調するようになる：

Another local consequences of the trial was a Hindu-Moslem entente. Loud protestations of amity were exchanged by prominent citizens, and there went with them a genuine desire for a good

understanding. (p. 260)

Moslem の Aziz も一時は「一般印度人」(“the general Indian”) というものを信じる事が出来なかったが、終りにはそういうものの存在の可能性を信じるようになる。Magistrate の Das 氏の依頼を受け、「一般印度人」のための雑誌に、多数の人に喝采をうける新しい詩を書こうとする。その雑誌への原稿として、最初は Islam の衰退と恋のはかなさを歌った詩を書いたが、それは Hindu 人には興味のあるものとは思えなかったので、次に諷刺詩を書く。これは印刷に出来そうもないと考えて、Islam でない多数の印度人にも読んでもらえるようなものを。それに応しい言語で書こうと考えるのである。そして、過去に恋々としないうことを誓い、未来の歌は教義を超越したものでなければならないと考える：

... this evening he longed to compose a new song which should be acclaimed by multitude and even sung in the fields. In what language shall it be written? And what shall it announce? He vowed to see more of Indians who were not Mohammedans, and never to look backward. It is the only healthy course. Of what help, in this latitude and hour, are the glories of Cordova and Samarcand? They have gone, and while we lament them the English occupy Delhi and exclude us from East Africa. Islam itself, though true, throws cross-lights over the path to freedom. The song of the future must transcend creed. (p. 261)

更に第 3 部に於ては、2 年後 Mau に Fielding 夫妻と Ralph Moore を迎えた Aziz は、「一国民としての印度」(“India a nation”) という言葉を超人的な理想として賛美することを Fielding に向って叫ぶ：

‘India shall be a nation! No foreigners of any sort! Hindu and Moslem and Sikh and all shall be one! Hurrah! Hurrah for India! Hurrah! Hurrah! (p. 317)

究極の理想に於ては、印度は一つのものとならなければならないと Aziz は考えているのである。

以上検討したものは Aziz だけの考えではあるが、minor character では Das 氏も同じような考えを持っている。Professor Godbole は Hindu 教の中に印度を統合するような要素を求めているし、イギリス人では、Mrs Moore にしろ、Miss Quested にしろ、level の差こそあれ、知ろうとする対象の印度としては、Hindu の印度とか、Islam の印度という区別したのではなく、「印度」というものである。Fielding についても同じことは言えよう。このように考えてみると、第1章に於て、Hindu と Moslem の二つに明瞭に分けないで、ただ“temple”という漠然とした語で、少なくとも二種の宗教を総合体として表わし、そういうものに対するキリスト教——印度人とイギリス人との対比と考えるのが妥当であろう。

このように、第1章の第1番目と第2番目のパラグラフに於ては、イギリス人と印度人という二つの異質な民族の対立が非常に明確に提出されているわけである。そして、これらの二要素が交わる中心の場として、第1章の冒頭と末尾に言及されている extraordinary な Marabar Caves がある。仮に、Chandrapore にキリスト教徒であるイギリス人という要素がなければ、この市は、Ganges 河流域の普通の市と変わるところもないみずぼらしい市にしかすぎないし——“Except for the Marabar Caves ... the city of Chandrapore presents nothing extraordinary” (p. 9)——そこから眺める Marabar Hills もロマンティックに見えるだけなのである。(第13章に“These hills look romantic in certain lights and at suitable distances ...” (p. 126) という表現がある) 遠くからはロマンティックに見える丘も、その丘にある caves に異質な二要素が入ることによりはじめて丘それ自身も、市も extraordinary になるのである。この extraordinary になるということは、人間対人間という関係に於て extraordinary になることである。第2部という最も長い部分、この小説の丁度

半分のスペースがさかかれている part が “Caves” と名付けられていて、最も大きな出来事が起きる意味も、第1章が extraordinary な Caves のことで始まり、extraordinary な Caves のことで終る意味も、そういう人間対人間という意味に於てである。

今迄にみたテーマや image 以外に、第1章には、この小説にある殆んどすべての重要な images が何らかの形で提示されている。河や大地の曲線から連想される snake の image (Caves は屢々 snake image と関連している)、ancient tanks (第3部の Mau の大貯水池)、birds、雨期の後のこと、“the civil station ... provokes no emotion” ということ、civil station と Chandrapore の下町との唯一の共通なる sky、しかもそれが arch であることと昼夜を通じて blue であること、stars (“like lamps from the immense vault”), light, climates と seasons、太陽から strength が来ること、the prostrate earth からは size がくること、“the flat earth”, “the endless expanse” を阻んでいる the Marabar Hills、等々である。これらのものは “repetition plus variation” という形で転回され、重要な function をもつものであるが、それらを一つ一つ検討することはここではさけ、イギリス人对印度人という、二要素が交錯する場 Marabar Caves を中心に、イギリス人がどのように印度人に対するかを、主要なイギリス人の各々の場合に従って考察することにより、第1章の作品全体に対する意義を検討してみたい。

まず我々が取りあげる第1番目の人物は、Chandrapore の市にいる最も典型的なイギリス人である Ronny Heaslop である。

Abinger Harvest に収録されている “Notes on the English Characters” というエッセイで、イギリス人の国民性は本質的に “middle-class” 的で、public school の制度が強調し育成してきた横柄、権力、愛好的な独自の人間であることであると、Forster は述べている。Ronny Heaslop

は印度へ来てまだ間もない magistrate であるが、彼の印度人に対する態度には public school の卒業生的なものがはっきりみられる。彼自身自分が Chandrapore にいる目的は、印度人を喜ばすためではないと言い、次のように続けている：

“I am out here to work, mind, to hold his [Indian’s] wretched country by force. I’m not a missionary or a Labour member or a vague sentimental sympathetic literary man.” (p. 50)

これは支配者が被支配者に対する態度であって、Chandrapore の下町とは全く異質な高台に住む典型的な人間の言葉であり、印度人との人間対人間という関係を考える場合には、問題にもならない態度を表わすものである。確かにこの市では、「イギリス官僚主義は、太陽のごとく一切に浸透し、太陽のごとく不愉快に、儼としてあった」(“British officialism remained, as all-pervading and as unpleasant as the sun” (p. 252). Ronny は多くの在印度イギリス人のように、印度人の人格を認めない人間であって、そういう人間はこの市としては決して extraordinary な存在ではないのである。

こういう息子の考えや態度を遺憾に思う Mrs Moore は、

‘The English are out here to be pleasant.... Because India is part of the earth. And God has put us on the earth in order to be pleasant to each other. God ... is ... love.’ (p. 51)

と考える女性であって、その考えはキリスト教的であり、人道主義的善意の立場に立っている。そして、神は愛である(“God is love”)と言う。彼女が Aziz を見る目は、終始印度人を友として見ようとする目である。第2章で、誰にも案内もされずに mosque に靴を脱いで入っている彼女を Aziz がとがめる時の彼女と Aziz との会話はこの点をよく表わしている：

‘If I remove my shoes, I am allowed?’

‘Of course, but so few ladies take the trouble, especially if thinking no one is there to see.’

‘That makes no difference. God is here.’ (p. 21)

ところが、Mrs Moore のこのような態度や心境は Marabar Caves への excursion をして、背中に直射日光を浴びながら (the sun crashing on their backs, (p. 144)), 岩を登り第1番目の Cave に入る頃より変化がある：

A Marabar cave had been horrid as far as Mrs Moore was concerned, for she had nearly fainted in it, and had some difficulty in preventing herself from saying so as soon as she got into the air again.... Crammed with villagers and servants, the circular chamber began to smell. She lost Aziz in the dark, didn't know who touched her, couldn't breathe, and some vile naked thing struck her face and settled on her mouth like a pad.... For an instant she went mad, hitting and gasping like a fanatic. For not only did the crush and stench alarm her; there was also a terrifying echo. (p. 145)

洞窟が人で一杯になり、悪臭が満ち、暗闇の中で、何かいやらしい裸のもの（実はインド人婦人の背中におわれていた赤ん坊の足）が彼女の顔にあたり、¹その上、一つの反響が彼女を恐怖させた。この反響が Mrs Moore の心境に決定的なものを与えるものである。彼女は二度とこの経験を繰り返えしたくないと思う。実に不安な経験であった。押しあいと悪臭はまだ忘れることが出来ても、反響は彼女が今迄もっていた人生についての確信を打ちのめしたのである。「pathos, piety, courage —— こういうものは存在するが、それらは皆同じ一つのもので、醜悪 (filth) もそれと同じである：あらゆるものは存在するが、価値あるものはなに一つない」とは彼女に響いたのである：

... the echo began in some indescribable way to undermine her hold on life. Coming at moment when she chanced to be fatigued, it had managed to murmur, 'Pathos, piety, courage—they exist, but are identical, and so is filth. Everything exists, nothing has value.' If one had spoken vileness in that place, or quoted lofty, the comment would have been the same — 'ou-boum'. (p. 147)

たとえ誰かが天使の言葉で、過去、現在、未来の不幸や不和を説いたとしても、結局それは、どうなることでもなく、「蛇が下りて来て、また天井へのぼってゆくだけのことである」(it would amounts to the same, the serpent would descend and return to ceiling. (p. 147)) たとえ、悪魔についての詩を書くことが出来たとしても、Marabar caves を romanticize することは出来ないのである。「何故ならば、人類に悪魔と和解させるのは、この広漠という性質だけであるのに、この性質の無限性、永遠性をも奪い去ってしまうからなのである」("because it robbed infinity and eternity of their vastness, the only quality that accommodates them to mankidd.") (p. 147))

Marabar cave はこのように、印度人を友として理解しようとしてきた Mrs Moore の善意と愛の考えを無感動な倦怠的な虚無感へと変えさせた。印度へ来た目的である Ronny と Adela との婚約が成立したのに、彼女は男女の結合に何の意味も感じなくなるし (p. 197), Aziz の innocence を信じていながらも公判で彼の弁護を進んで引受けることもなく、半ば息子の Ronny にしむけられ、半ば自からの意志で公判前に印度を去ろうとする：

She had come to the state where the horror of the universe and its smallness are both visible at the same time — the twilight of the double vision in which so many elderly people are involved... in the twilight of the double vision, a spiritual muddledom is set up...

we can neither ignore nor respect Infinity. Mrs Moore had always inclined to resignation. As soon as she landed in India it seemed to her good, and when she saw the water flowing through the mosque-tank, or the Ganges, or the moon, caught in the shawl of night with all the other stars, it seemed a beautiful goal and an easy one. To be one with the universe! So dignified and simple, but there was always some little duty to be performed first, some new card to be turned up from the diminishing pack and placed, and whilst she was pottering about, the Marabar struck its gong. (pp. 202-203)

Marabar cave の echo は、確かに彼女には “Something very odd and very small. Before time, it was before space also. Something snub-nosed, incapable of generosity — the undying worm itself.” (p. 203) であった。そして、Mrs Moore は印度を去り、印度洋上で死ぬ——“the sun touched her for the last time and her body was lowered into another India — the Indian Ocean.” (p. 249) Marabar Caves は Mrs Moore のとった態度を否定する。彼女の名前 “moor” が「船をつなぎとめる」ということを意味するにもかかわらず、皮肉にも彼女自身と印度人を友達として理解しあうことをつなぎとめておくことは出来なかった。

Adela Quested は、婚約をしようとしている相手の Ronny Heaslop を英国では知っているが、印度で彼がどういう人間かを知らないために、それを知らうとして、Mrs Moore と一緒に Chandrapore へやってくる。Chandrapore で彼女を待ちうけていたのは Marabar Caves での事件である。洞窟へ入る前 Quested は Ronny を本当に愛しているかどうか、婚約をどうしようかと考え、Aziz に自分としては上品な尋ね方であると思う仕方で質問する：

Probably this man [Aziz] had several wives — Mohammedans always insist on their full four, according to Mrs Turton. And having no one else to speak to on that eternal rock, she gave rein to the subject of marriage and said in her honest, decent, inquisitive way: “Have you one wife or more than one?” (p. 151)

自分では上品な尋ね方であると思った仕方も、Aziz に大きなショックを与えることになる。何故なら、その問は Aziz の属する社会が抱いている一つの新しい信念に挑戦するものであったからである：

It challenged a new conviction of his community, and new convictions are more sensitive than old. If she had said, ‘Do you worship one god or several?’ he would not have objected. (p. 151)

教養ある印度の回教徒に向って、何人の妻があるかと尋ねることは、「怖るべき、呪わしいこと」(“appalling, hideous!” (p. 151)) なのである。これを聞いた Aziz は “Damn the English even at their best.” と思い、精神の平衡をとりもどすため、その道の頂にある沢山の洞窟の一つに跳びこむ。

Adela の名 “quested” が示すごとく、彼女は確かに印度を探求しようとしたし、事実探求もした。自分は何も特別なところがないから decent な sensible な人間になるため、Akbar のような「普遍的宗教」すらを求めた：

‘... there’s nothing special about me, nothing special good or strong, which will help me to resist my environment and avoid becoming like them. I’ve most lamentable defects. That’s why I want Akbar’s “universal religion” or the equivalent to keep me decent and sensible.’ (p. 144)

しかし、Ronny と結婚することによって “Anglo-Indian” というラベルをはられることを好まなかった Adela の探求の深さというものは、所

詮、Aziz への質問が示す程度のものである。勿論 Mrs Turton や Mrs Callendar のように、印度人に対して狭量でお高くとまっている所謂 Anglo-Indian になることは恥ずべきことである。

Adela は、Mrs Moore のように Aziz の innocence を公判で表明もせず帰国することはなかったし、echo に悩まされつづけられたとはいえ、法廷では真実を語った。そして、それにより新しい感覚すら感ずることが出来た：

A new and unknown sensation protected her, like magnificent armour. She didn't think what had happened, or even remember in the ordinary way of memory, but she returned to the Marabar Hills, ... The fatal day recurred, in every detail, but now she was of it and not of it at the same time, and this double relation gave it indescribable splendour. (p. 221)

しかし、如何に新しい感覚を覚えたとは言え、Adela Quested と caves との関係は、印度を愛そうということを第一義的な目的としたものではなかった。Ronny との関係に於て、印度を理解しようとして、彼女は Marabar caves に入ったのである：

Adela had always meant to tell the truth and nothing but the truth, and she had rehearsed this as a difficult task — difficult, because her disaster in the cave was connected, though by a thread, with another part of her life, her engagement to Ronny. (p. 221)

彼女が供述を取り消した時でも、それは、彼女が苦しめた人々に対する愛の情熱からではなかった。真実は印度では慈悲とともになければならないのであって、Adela の犠牲は、その意味では、西欧的な観念からのものであつて、印度では真に受け入れられるものではないのである。このことは Hamidullah の心を通して次のように書かれている：

... indeed from his [Hamidullah's] standpoint she was not [sincere].

For her behaviour rested on cold justice and honesty; she had felt, while she recanted, no passion of love for those whom she had wronged. Truth is not truth in that exacting land unless there go with it kindness and more kindness and kindness again, unless the Word that was with God also is God. And the girl's sacrifice—so creditable according to Western notions—was rightly rejected, because, though it came from her heart, it did not include her heart. A few garlands from students was all that India ever gave her in return. (p. 238)

このことは、公判後、イギリスへ帰国する途上エジプトに寄った時、アメリカの—牧師とスエズの開発創設者 Lesseps の像を前にして、二人が話すことと考え合せると興味あることである：

‘To what duties, Miss Quested, are you returning in your own country after your taste of the tropics?’ the missionary asked. ‘Observe, I don't say to what do you turn, but to what do you *re*-turn. Every life ought to contain both a turn and a *re*-turn. This celebrated pioneer’ (he pointed to the statue) ‘will make my question clear. He turns to the East, he *re*-turned to the West. You can see it from the cute position of his hands, one of which holds a string of sausages.’ ... he often used words in pairs, for the sake of moral brightness. ‘I see,’ she replied. Suddenly, in the Mediterranean clarity, she had seen. (p. 258)

彼女がイギリスへ帰ってからの最初の義務は Mrs Moore の二人の子供 Stella と Ralph に会いに行くことであった。(p. 259)

以上のことから分かるように、Adela Quested の Chandrapore での目的も行動も、実はイギリス人と印度人との人間としての関係に於てではなかったのである。帰国を目前にして、Fielding と Adela が Mrs

Moore のことを語り、“Telepathy” という語を Adela が使った時に、作者が次のように書いていることは当然なのである：

Perhaps life is a mystery, not a muddle; they [Adela and Fielding] could not tell. Perhaps the hundred Indians which fuss and squabble so tiresomely are one, and the universe they mirror is one. They had not the apparatus for judging. (p. 256)

印度を理解しようとしたのでは印度は理解出来ないものである。Adela も本質的に印度を理解出来ない存在である。“adela” とは Germanic で “noble” という意味であるが、彼女の場合も、Mrs Moore の “moor” の如く、名前は ironic であった。印度を understand しようとする “adela” “quest” に彼女は失敗したのである。或る時、Aziz が Adela に、印度を understand しようとするな、印度をただ愛せよというが、Adela は印度を愛しようとしたことはなかった、彼女は “quest” しようとして失敗したのである。

次に検討する人物は、cave excursion に遅れて行ったために cave には入らなかったが、cave での事件とは終始重要な関連をもっている Cyril Fielding である。無神論者ではあるが、Mrs Moore とは対称的に人道主義的善意で動く人物であり、Hamidullah に同国人を敵にまわしても印度人を味方するか (“... you actually are on our side against your own people?”) と聞かれて、“Yes, Definitely” (p. 172) と答える。彼は、“I believe in teaching people to be individuals, and to understand other individuals. It’s the only thing I do believe in.” (p. 118) という西歐的な態度をもって事件にあたる。

クラブで Aziz を支持することを言明した Fielding が、クラブの二階のベランダへ出た時、最初に目に入るものは Marabar Hills であった。その距離で、その時刻で、ベランダから Marabar Hills を見ると丘は突如として美しくなる。女王のように優美に自分に近づいてくるように思わ

れ、丘の美しさは空そのものの美しさとなり、丘は夕闇につつまれる一瞬全世界と一つになり、星が輝きはじめると、全宇宙が一つの丘となる。そんな風に Fielding には見えた：

At this distance and hour they [the Marabar Hills] leapt into beauty; they were Monsalvat, Walhalla, the towers of a cathedral, peopled with saints and heroes, and covered with flowers. What miscreant lurked in them, presently to be detected by the activities of the law? Who was the guide, and had he been found yet? What was the 'echo' of which the girl complained? He did not know, but presently he would know. Great is information, and she shall prevail. It was the last moment of the light, and as he gazed at the Marabar Hills they seemed to move graciously towards him like a queen, and their charm became the sky's. At the moment they vanished they were everywhere, the cool benediction of the night descended, the stars sparkled, and the whole universe was a hill. (pp. 186-187)

ところが、法廷で Quested が訴訟を撤回すると、Aziz は Quested より2万ルピーの慰謝料を希望する。Fielding はそれに賛成しない。こういうことから、Aziz は Fielding を嫌うようになる。Fielding は Aziz が自分に敵意をもっていることを意識はしていたが、持前の楽天的な考えから、(p. 273) 帰国を前にして Aziz へ手紙をかく：

'It is on my mind that you think me a prude about women. I had rather you thought anything else of me. If I live impeccably now, it is only because I am well on in the forties—a period of revision. In the eighties I shall revise again. And before the nineties come—I shall be revised! But, alive or dead, I am absolutely devoid of morals.' (p. 273)

印度人たちも Fielding を好きであったが、彼があまりにも彼等の私生活について知るようになったことには不安を感じているのである。(p. 273) 従って印度人と Fielding の心の距離は段々離れて行き、Fielding はイギリスへ帰国する。そして、二年後、今は妻となった Mrs Moore の娘 Stella を連れて、Mau に来た Fielding も、結局は、Aziz とはどうしても分かれねばならないと思う：

All the stupid misunderstandings had been cleared up, but socially they [Fielding and Aziz] had no meeting-place. He had thrown in his lot with Anglo-India by marrying a countrywoman, and he was acquiring some of its limitations, and already felt surprise at his own past heroism. Would he to-day defy all his own people for the sake of a stray Indian? Aziz was a momento, a trophy, they were proud of each other, yet they must inevitably part. (p. 314)

相互には印度人とイギリス人は友達になることを望んでいるのに、彼等は眞の友達になれない——“Why can't we be friends now?... It's what I want. It's what you want.”(p. 317) であるのに、彼等は友達になれないのである。

このように the Marabar Hills は、最初は、印度人とイギリス人との交友関係を作るきっかけを与え（印度人である Aziz がイギリス人を excursion へ連れて行くということは、印度にいるイギリス人としては考えられないことであった）、次に cave 中の出来事でその関係を破壊し、両者の交友関係を一見不可能にしたように見せかけ、次には、公判への準備と公判を通して、交りの可能なような結果を生むが、最後には、その不可能なことを知らせる agent なのである。Marabar Caves のみが Chandrapore の市で extraordinary であったのは、そういう可能性を秘めているからこそ extraordinary であったのである。その可能性を否定する

ことは extraordinary でなくなることである。Mau の大貯水池でも、Aziz と Ralph を乗せたボートが、Fielding と Stella を乗せたボートと衝突し、共に顛覆することによって、Hindu 教の祭りを通して、二つの異質なものの結合がなされたかの如く見えるが、これが「印度の許す範囲のクライマックス」(“That was the climax, as far as India admits of one” (p. 310)) なのである。

同じ水に関係のある言葉で言えば、第1章にあるように、Ganges 河の水があふれて引いたあとも結局は何も残らないのである。ただ「こちらが膨れたり、あちらが縮んだりするだけ」(“swelling here, shrinking there” (p. 9))なのである。イギリス人の住んでいるところは風景のみが美しく(“only the view is beautiful” (p. 10)), そこから見える Chandrapore の市は、本当の姿ではなく、ちがったように見える。一方、印度人の住んでいるところは、“The wood seems made of mud” で、住民は “mud moving” である。実際、「新来の客は、河べりの低地へ馬車を駆りて下りるまでは、幻滅の嘆きを味わうことが出来ない」のである——
“new comers cannot believe it to be as meagre as it is described, and have to be driven down to acquire disillusionment.” (p. 10)

印度とイギリスに関して、ただ一つ共通なのはその空だけである。しかし、その空にも相違はあるが、“It [the civil station] shares nothing with the city except the overarching sky. / The sky too has its change.” (p. 10) その空が一切のものを決定するのである。

The sky settles everything—not only climates and seasons but when the earth shall be beautiful. By herself she can do little—only feeble outbursts of flowers. But when the sky chooses, glory can rain into the Chandrapore bazaars or a benediction pass from horizon to horizon. The sky can do this because it is so strong and so enormous. Strength comes from the sun, infused in it daily,

size from the prostrate earth. No mountains infringe on the curve. League after league the earth lies flat, heavens a little, is flat again. (pp. 10-11)

この空と大地の無限の広がりやを阻止するのが Marabar Hills であった。従って、最後の章の最後のところでは、すべてが失敗に終わったため、彼等の目の前に現われてきたものは、“No, not yet,” と、そして、空は “No, not there” と言う：

‘Why can’t we be friends now?’...

But the horses didn’t want it—they swerved apart; the earth didn’t want it, sending up rocks through which riders must pass single file; the temples, the tank, the jail, the palace, the birds, the carrion, the Guest House, that came into view as they issued from the gap and saw Mau beneath: they didn’t want it, they said in their hundred voices, ‘No, not yet,’ and the sky said, ‘No, not there.’ (p. 317)

“not yet” は time の面で、“not there” は space の面での二つの交りの否定の答えである。場は Chandrapore から西へ数百マイルの Mau へ、時間は cave での事件から二年後に移っているが、any time and anywhere in India での否定の答えである。

Turton 長官が East と West の Bridge Party を催した時の空は有らゆる周辺から光をそそいでいた (“the sky, not deeply coloured but translucent, poured light from its whole circumference. (p. 40)) と見えたが、実は、その場所は Chandrapore の下町でもなかったし、第1章にあるように、空は美しい庭園をしめだしていたのである。彼等イギリス人たちは、自からは Chandrapore の市へ下りて行かず、印度人たちを自分たちの方へ引き寄せてその姿を見ようとしたのである。彼等は印度人を愛そうとしたのではなく、自分たちの level に印度を引きあげて、理解し

ようとする態度をとったのである。そういうものに対しては、Chandrapore の市の輪廓はどこまでも強情で (“the general outline of the town persists ...” (p. 9)) あり、「招かれた客の外は寄せつけない」 (“... filth deters all but the invited guest.” (p. 9)) ものであり、住民は「動く泥」なのである。Chandrapore でのイギリス人たちの住宅の場所が示すごとく、彼等は印度に入らなくて、外から印度と対応するか、或は、交友を結ぼうとしただけなのである。水が引いたあとは何も残らないように、第1章はすべてそのまま、もう一度、第38章として使われてもよいのである。Whitman の詩句にある “Passage to more than India” 即ち “inside India” への passage は *A Passage to India* ではすべて失敗に終わったが、another passage を行えば、the Marabar Hills はもう一度 extraordinary となり、第1章が始まる。

註

- 1) E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (New York: Harcourt, Brace & Co., Inc., 1954), p. 161.
- 2) *Ibid.*, p. 168.
- 3) Whitman, “Passage to India,” Section 9, ll. 1-3, 7-9 and Section 5, ll. 24-29.
- 4) References to *A Passage to India* are to the Penguin edition.
- 5) E. M. Forster, “Notes on the English Characters (1920),” *Abinger Harvest* (London: Edward Arnold & Co., Pocket edition, 1953), pp. 23-24.